

一橋の女性たち

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。

第11回は、主婦の池上淳子さんにご登場頂きました。

聞き手は言語社会研究科のイ・ヨンスク (李妍淑) です。

自分の中にある「何かヘン」と思った気持ちをまとめたのが シャドウ・ワーカーズ宣言でした

自立できない労働を割り振って 障害者に自立を求める「ヘン」

イ 池上さんが社会学部を選ばれたのは、どういう理由からですか。

池上 なんとなく社会科学全般に興味があったので、家から通える大学にそれを学べそうな学部があったというのが、一橋大学に入学した理由でした。社会学部は何を学ぶ学部なのか実際にはわかっていなかった。わからないからおもしろそうだと思ったのかもしれません(笑)。

イ 当時は女子学生は少なかったでしょう。卒業後の進路をどんな風

に描いている人が多かったのですか。

池上 女子学生は1年生のクラスでは3人、全体で30人ぐらいでした。官公庁や一流企業に入って活躍したいと考えている女子学生も、もちろんたくさんいました。でも、なにしろ当時は女性は就職するなら短大へ行った方が有利といわれていた時代。私自身には、社会の中でキャリアを積んで社会的成功をおさめるという道が明確に見えていたわけではありません。勉強したいことを学びたい、それを社会で活かしていけたらというスタンスでした。

イ 当時は「夫の庇護の下にいる方が女としては幸せ」という社会通念に揺らぎはなかったでしょうね。ご自身では、どう思っていたのですか。

池上 そのような社会通念や、「女の幸せ」という言い方自体には反発を感じていました。ずっと働いていきたいという気持ちも持っていたので、高校の社会の先生になって地に足の着いた生き方をしようと考えました。でもほとんど採用がなくて、卒業後の1年間はぶらぶらして、1987年4月から都内の障害児学校の高等部に社会科教員として勤めることになりました。短い間でしたが、ここで働いたことで、随分いろいろなことを考えさせられました。

イ 具体的にはどんなことですか。

池上 私の担当した学級は重複学級といって、いくつもの障害を併せ持った生徒たちがいました。そこでは実技でない科目を教える教員は期待



池上淳子 (いけがみ・じゅんこ)

1986年、一橋大学社会学部卒業。

1987年、都立立川ろう学校高等部の社会科教師に。

後に結婚、出産を機に退職。

1998年、ろう学校時代の経験と主婦の視点から社会を見つめた「シャドウ・ワーカーズ宣言」を発表。一男一女の母。

されていなくて(笑)。そういう意味では無能な教員だったのですが、そんな私がメインで任された仕事は作業実習の指導でした。子ども向けの雑誌の付録で組立式の玩具や教材があるでしょう。そういうパーツを折ったり、数えて袋に入れたりする作業です。当時、今でもそうかもしれませんが、その学級の子どもたちは卒業しても一般企業に就職することができなかった。福祉作業所や共同作業所に入ることになるのですが、そのような作業所で行う作業の訓練だったんですね。私自身、そのような場で障害者が単純作業を行うということに、それまで疑問を持ったことはなかった。ところが、実際に指導してみてもびっくりしたのが、「こういう作業ってこの子たちに合っていない」ということだったんです。指先に麻痺のある生徒や数を数えられない子、じっと座っていることができない子どもに、一般企業の仕事は合っていないのかもしれないけれど、だからといって付録の仕事が向いているわけではない。私がやった方が速いですから、むしろ私に向いている仕事なんじゃないかと(笑)。

ではなんで向いてないのに障害者だからといってそのような作業をしなければならないのかというと、障害者でも働いて自立しなければならないからと。それはその通りだと思うのですが、付録の仕事をやって自立できるかというと、全然できない。今はもう少し良くなっているのかもしれませんが、その頃作業所で毎日一生懸命作業をやっても、報酬は月3000円くらいだったでしょうか。そのような仕事が存在するのは、そうでないと成り立たない商品があるからで、その仕事が「障害者のための仕事」みたいにして割振られているのは、それが障害者に向いているからではなくて要するに経済合理性のためで、そういう意味では納得せざるを得ない事態ではあるのですが、じゃあそこで言われる「自立」って何なんだろう、と。

もちろん障害者にとって作業所という場があることは大切なことで、そこで働くことを障害者が望んでいるのであれば、そのための教育も必要なことで、そのことが「ヘン」ということではないんです。そうではなくて、それを当たり前のことのようにして回っている社会の方の「ヘン」をどういうふうにして言葉にしたらいいのかな、と。毎日仕事をしながら、そんなことをずっと考えていました。



労働は存在しているのに 労働とは認められない「ヘン」

イ 後で何おうと思っていますが、障害児学校時代のそうした経験は池上さんが「シャドウ・ワーカーズ宣言」を書かれたキッカケの一つになっているわけですね。学校の現場を離れられた理由は、出産だったんですか。

池上 たまたま結婚したらすぐ子どもを授かってしまって(笑)。当初は育休後職場復帰するつもりでしたが、保育園に空きがなかったんです。

預かってさえくれればどこでもいいとは思えませんがに思えませんでした。その頃夫が失業中だったので、一時は夫が育児をして私が職場復帰するという話になっていたのですが、土壇場になってひっくり返ってしまった。その理由は、その選択はお互いにとって不自然なことだということがわかったから、としか言いようがないのですが。さっきの話で言えば、「子どもを育てることが女の幸せ」というような社会通念に縛られることは不幸なことですが、だからといって自分がいま本当は何をしたいのか、子どもにとって一番必要なことは何なのか、ということを見失ってしまうのも不幸なことだ、ということでしょうか。ですから、あの

時仕事を辞めたこと自体に後悔はありません。

イ 原理原則で選ぶのではなく、文脈に沿って選択することがベストだと思いますね。現実にはなかなかそうできにくいんですが。

池上 でも、ただの主婦として世の中と向き合ったとき、またいろいろな「ヘン」を感じてきてしまった。例えば私、一生で一番大変な労働だったのはいつかと聞かれたら、子どもが生まれてからの3カ月間と答える、絶対(笑)。ところが、ではそれがこの社会のシステムの中で労働として存在しているのかというと、そうではない。それどころか、「夫に甘えている」とか「自立しろ」と説教されてしまう。そういうことを「ヘン」と感じる気持ちが、教員時代の経験と重なったのが、近所の同じように子育てをしているお母さんが、ボールペン組み立てなどの内職をしているのに気が付いたときです。あれ、それってこの間まで私が担任していた子どもたちにやらせていた作業と一緒に、と。そのときまでも、



イ・ヨンスク(李 妍淑)
言語社会研究科教授



障害者が作業所で作業をするということと同じように、主婦が家で内職するということが当たり前のように思っていたはずなのですが、なんだかそのとき頭をがつんと叩かれたような気持ちになって。もちろん障害者と主婦が

同じものということでは全くないのですが、その労働の社会への組み込まれようが同じだな、と思ったんです。そういうところから、いろいろなことを考え出してしまった。それを何とか言葉にしてみたかった。誰かに伝えるためというのではなく、自分が何を「ヘン」だと思って何を考えているのかということ、自分できちんとつかみかけたからです。

イ それ「シャドウ・ワーカーズ宣言」ですね。書き始められたのはいつ頃ですか。

池上 下の子が幼稚園に入って、時間的に少しゆとりができたときです。基本的には日常生活を営んでいくことが主ですし、書いては消し書いては消しで、「あ、これなら書ける」というところにくるまで1年かかりました。人に見せるために書いたわけではないのですが、まとまった量になったところで冊子にして、ミニコミ誌や少数の出版物を専門に扱っている書店に置かせてもらいました。公民館の印刷機



で自分で印刷したものをホチキス止めしただけ、活字ばかりで異様に分厚い、絶対に苦痛なしには読めないというシロモノなんですけど（笑）、なぜか反響があった。それも、主婦だけでなくフリーターとかいろんな層の人から。それをキッカケに読者交流会や学習会が始まりました。

イ 「シャドウ・ワーカーズ宣言」を書かれたことで、ご自分のなかでの変化はありましたか。

池上 自分自身が何を考えているのかわかった、という当たり前のようなことですけど。そして、社会で起きているいろいろなことを考えるときに、どこかで誰かが言っていることを借りてきてわかったつもりになるのではなく、自分なりに考えるスタンスができた、ということでしょうか。それが客観的に見て正しい考え方なのかどうかはわかりませんが（笑）。

自分の中の原理原則を大切に生きていければ

イ お子さんが大きくなられてから、お仕事を再開なさったと伺いましたが。

池上 お金がもらえる労働という意味で言えば、下の子が幼稚園の頃から学習用教材の添削の仕事を始め、途中からパートタイムの契約社員という形で働くようになりました。今は公民館で働いていますが、嘱託なのでこれもパートといっていると思います。パートの仕事は惨めという差別的なイメージがあるんでしょうね。大学時代の友人でいまは偉くなっている男性たちに「パートで働いている」と言うと、ぎょっとされる。でも、そういうことも考える材料として面白い（笑）。

イ 池上さんは、主婦という仕事を生活の中心に置き、社会に発言するスタンスと言葉をキチンとっておられますね。仕事か家庭かという選択を含めて、自然体で歩いてこられた姿が印象的ですし、とても素敵だと思います。いま女子学生を見ていて気になるのは、カギカッコ付の「成功」物語にとられ過ぎていることです。大学1～

2年生といえば、高校までの抑圧から解放されて伸び伸びと弾けられるときなのに、そうではないんですね。成功のモデルがあり、そうならなくてはいけないという思い、そうならなかったらという不安がとても強い。優等生ほど不安感が強いです。

池上 自分から離れたどこかに原理原則があつて、それに自分を合わせるのではなく、自分自身にとっていま一番大切なのは何なのかということ、これを原理原則にすれば大丈夫なのではないかと思っています。一橋出身女子の落ちこぼれの私が言っても説得力がないかもしれませんが（笑）。

イ いまの社会は、社会自体が不安の種を蒔いているように思います。成功感といったものがもっと多様であつていいし、80歳になったときにどういう姿になっているかが、大事だと思います。

池上 そうですね。それまでは、日々を精一杯、自分らしくでしょうか。

対談を終えて

池上さんは、しっかりとした御自分のことばをお持ちになっている方でした。しかも、彼女のことは、他者をあたたかく迎え入れる開かれたことばでした。それは、社会では当たり前だと思われていることでも、池上さんのなかに「どこかおかし」と

いう疑問が生じると、そこで立ち止まり、誠実に問題を考えるという姿勢のなかから、ゆっくりと熟成してきたことばであるように感じました。

他人を押しつけて、競争に勝つことだけが称賞される風潮のなかでは、社会の明るい面だけが注目され、社会の影の部分である「シャドウ・ワーク」の存在は無視されがちです。現在の社会は価値観が多

様化していると言われることがよくありますが、むしろその反面、物事を見る視野は狭められているような気がしてなりません。池上さんのことばは、真の意味の多様さと豊かさを追求する人々に、力強い励ましとヒントをあたえてくれることでしょう。

池上さん、大切なお話をありがとうございました。
(イ・ヨンスク)